アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa（ＡＯＳＡ）

2011 年度活動報告（2011 年４月～2012 年３月）　No. 4

2012 年 6 月発行

（2011 年 8 月、Pemba にて、内藤撮影）

アフリカ眼科医療を支援する会

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15　徳島大学医学部眼科学分野内

TEL：088-633-7163,　FAX：088-631-4848

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地　新潟大学医学部眼科学講座内

TEL：025-227-2296,　FAX：025-227-0785

Ⅰ．巻頭言 ……内藤　毅３
Ⅱ．活動の現場から ……４
第４回モザンビークアイキャンプ日記 ……内藤　毅４
AOSA の進化に誘われて ……長澤利彦 6
AOSA プロジェクト 2011 に参加して……社本真紀 7
AOSA アイキャンプに参加して ……沼田美紀８
第４回モザンビーク眼科医療プロジェクトに参加して ……井口博之９
2011 年度第４回眼科医療プロジェクト報告 ……宝山晶子９
AOSA プロジェクトで学んだこと……竹山直子 10
アフリカ眼科医療を支援する会(AOSA)アイキャンプに参加して ……深川武司 11
Ⅲ．2011 年度事業報告 ……12
Ⅳ．2011 年度会計報告 ……13
Ⅴ．2012 年度事業計画 ……14
Ⅵ．2012 年度予算 ……15
Ⅶ．活動資金・物品提供者名簿 ……16
Ⅷ．「アフリカ眼科医療を支援する会」定款 ……17

（現地支援プロジェクト実行病院での記念写真、左から内藤、沼田、吉田、長澤、社本、宝山、深川、井口、2011 年８月、Pemba にて）

Ⅰ．巻頭言

AOSA 理事長・徳島大学眼科　内藤　毅

東日本大震災から１年が経ちました。復興の兆しのたよりが聞かれる中、現地の状況はまだまだ厳しいものと推察しています。東日本大震災におきまして、被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げます。昨年はアイキャンプをすべきかどうかの議論もありましたが、現地からの要請もあり行いました。そして私たちのアイキャンプチームにも二人の震災被災者が参加してくれました。彼らの参加と現地での積極的な貢献は私たちの活動を勇気づけてくれ、震災からの復帰に向けてのエネルギーを感じました。

世界の最貧国の一つで、人口約 2000 万人に対し眼科医が国中でわずか 13 名しかいないモザンビーク共和国（以下モザンビーク）への眼科医療協力を第一の目的として、アフリカ眼科医療を支援する会(AOSA)を設立し４年が経ちました。この間、皆様方の暖かいご支援ご指導のもと、2008 年６月から続けて４回のアイキャンプを発展的に無事に行うことが出来ました。

モザンビークでは、今なお医療に恵まれた日本からは想像できない過酷な環境の中で、人々はたくましく生活しています。特に僻地では眼科を受診し、治療を受けることは極めて困難です。しかも失明は貧困に拍車をかけ、患者は社会から取り残された存在となります。これらの失明患者の多くは白内障が原因であるため、手術により比較的早く視力を回復し、日常の生活を取り戻すことが出来ます。これは結果的には貧困の改善にも繋がります。

我々は当初から現地に赴き、現地の人々の声を直に聞き、状況を把握して活動して来ました。回を重ねるごとに現地との信頼は深まり絆が太くなって行くのが感じられます。

特にモザンビーク人眼科医をアイキャンプに招待し、技術援助を一歩一歩進めていることは、彼らとの絆が太くなり、モザンビークの眼科医療状況の改善に繋がると信じています。絶対的な医師数の少ない厳しい中、我々のプロジェクトに参加してくれた熱意に強い感銘を受けました。近い将来、彼ら自身で僻地での医療活動が出来るようになると思っています。

僻地での医療活動は、極めて困難な状況ですが、失明に苦しむ人々を救済するという使命感と手術後の患者さんのあふれる笑顔が我々の活動を支えるエネルギーです。現在９月の第５回アイキャンプに向けて準備中です。我々の活動は地道ですが、継続することによって、モザンビークの医療状況の改善につながれば幸いと思っています。そして、我々の活動が日本とモザンビークの友好の発展の助けになれば素晴らしいと思います。微力ながら日本の代表の一人として国際貢献する所存ですので、今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（Pemba のビーチの朝日）

（Pemba 空港で）

Ⅱ．活動の現場から

第４回モザンビークアイキャンプ日記

徳島大学眼科　内藤　毅

８月１２日（金)、阿波踊り開幕日であるが、11:15 徳島駅発のバスで私と長澤先生は関空へ向かい、関空で井口さんと落ち合った。前もって送ってあった荷物を宅急便会社カウンターで受け取り、キャセイパシフィック航空にチェックインした。今回は前もって船便で約 60 キロの荷物を送ってあるため超過料金もなくスムーズにチェックイン出来た。定刻通り、キャセイパシフィック CX507 便で香港に出発した。香港には予定通り到着し、既に羽田からの便で到着している社本先生とアルコンの深川さんと落ち合った。そして、ヨハネスブルグ行きの便の出発ゲートで、成田発の便で来た沼田さんも合流した。香港からはキャセイパシフィック CX749 で南アフリカのヨハネスブルグへ向かった。香港からヨハネスまでは約１２時間かかった。
８月１３日（土)、早朝のヨハネスブルグに着いた。こちらは冬なので肌寒い。ここで約４時間の待ち合わせの後、南アフリカ航空で最終目的地のモザンビークのペンバに向かった。南アフリカ航空 SA8204 便は約３０分の遅れで出発し、午後２時半にモザンビーク北部タンザニア国境近くのペンバに到着した。徳島を出て１日半の長旅であった。空港には徳島出身の宝山さんや一足早くモザンビーク入りした吉田さん、そして医務長官のセザリオ氏や昨年素晴らしく働いてくれた眼科助手のセルジオ氏が迎えに来てくれていた。Nautilus Beach Resort Hotel にチェックインした後、カボデルガド州立ペンバ病院に行き、明日に備え器具のセッティングを行なった。また、手術顕微鏡の組み立ても終了した。長旅の疲れのせいか、夕食後睡魔が襲って来て熟睡した。

（我々を待っていた患者さんたち）

８月１４日（日)、晴れ。時差ぼけのためか早朝に目が覚めたが、やや体がだるくもう一度寝た。朝７時に朝食をとり８時に病院に出発した。今年は保健省が車を手配してくれていて、病院の車が送り迎えしてくれている。毎年扱いが良くなって来ている、これも我々の活動成果が認められて来ているためのようだ。病院到着後、素早く診察と術前検査を始めることが出来、昼過ぎには約１３０人の眼軸長測定が終了していた。その後、真新しい手術場で手術器具の点検と配置を行い、滅菌を依頼し４時過ぎには本日のメニューを終了した。

（手術の準備中）

各自が自主的に昨年の結果をフィードバックし、素晴らしくてきぱきと動いてくれたため短時間で準備が終了したので、浜辺で子供たちを相手に遊ぶことが出来た。井口さんの回りにはいつも子供たちが群がる。おかげで今回もなかなか面白い写真が撮れた。いつの間にか長澤先生も現地の子供の中にとけ込んでいた。早めに夕食をとり就寝した。

（現地の子供の中にとけ込んでいる長澤）

８月１５日（月）晴れ。朝６時過ぎに朝食をすませ７時に病院に向かった。既に、たくさんの手術患者が待っていた。今日は手術初日なので、早めに準備

を始めたが、手術開始は９時近くになっていた。初めは手間取ったがだんだん調子に乗って来た。途中テレビモザンビークの撮影が入ったりしてなかなかにぎやかであった。二人のモザンビーク人眼科医たちも熱心に手伝ってくれ、意欲を感じた。社本先生も初めてのアイキャンプであったが、途中から実際に執刀し、最後にはかなり慣れた手つきでやっていた。夜７時には予定の６０人を終了した。その後手術器具を洗浄し、滅菌を依頼し、８時過ぎに予定を終了した。

８月１６日（火）晴れ。雲一つない清々しい朝なので早朝の浜辺を散歩した。美しい日の出とともに、漁師たちが小舟で沖にこぎだして行く風景が素晴らしい。のどかな雰囲気はネパールの僻地と通ずるところがある。朝８時に病院に行き、昨日の手術患者６０人を診察したが、全員経過は良好であった。やはり前日まで見えなかった人たちが視力を回復した喜びを全身で表現しているのは素晴らしい。回診後手術の準備をし、手術を開始したのは１０時半頃であった。社本先生もだいぶ調子が上がって来て、スムーズに進み夜７時頃には６３人の手術を終了した。本日はテレビモザンビークの全国放送番組『おはようモザンビーク』で我々の活動が放送され、既に数名が白内障手術を希望して病院にやって来た。ここでもメディアの力は大きい。

（テレビモザンビークの取材があった）

８月１７日（水）晴れ。アイキャンプも着々と予定を消化しつつある。昨日同様にまず、術後回診したが術後経過は問題なかった。その後、先天白内障の二人の子供の手術を全身麻酔でおこなった。アイキャンプで使用している新しい手術場にはまだ酸素などの配管が来ていないため全麻はできない。したがって、子供の手術は昨年使用した古い手術場を使用した。麻酔は昨年と同じキューバ人の陽気な年輩の麻酔医がかけてくれた。私が子供の手術をしている間に、外来では患者診察及び眼軸長測定を行ない、手術準備をした。最後の患者が到着したのは午後３時に近く、全部で３０人の白内障手術を行なった。また結膜腫瘍の患者が１名いた。今回のアイキャンプでは合計１５３人、１５５眼の白内障手術を行ない１３９眼（９０％）に眼内レンズを入れることが出来た。夜はセルジオを交えての夕食であった。彼もアイキャンプの成果に満足そうであった。既に来年の話題に移って行き、来年はさらに発展させようと話しあって更に夕食会は盛り上がった。

８月１８日（木）晴れ。朝８時過ぎに病院に行き、まず院長と面談した。今回のアイキャンプでは病院側の全面的な協力を得て、問題なく終了させることが出来た。院長も我々の成果を高く評価し、現地医療の改善のため、来年以降も協力してくれると言う。午前中にさらに僻地に帰る術後の患者がたくさんいるため、みんなで記念撮影をした。今年も笑顔のあふれる記念写真が撮れた。その後昨日の手術患者を診察をしたが、すべて順調であった。特に先天性白内障の患者は二人とも両眼手術したが大変きれいな術後所見であった。今まで見えていなかったため最初は戸惑っているようであった。泣いているので、どうしたのか聞くとうれしくて泣いていると答えてくれた。その後すっと立ちあがって、しっかりとした足取りで歩き出したときには、回りの人たちから拍手が起こった。手術をした我々の方が感謝の気持ちでいっぱいになった。みんなで来年のアイキャンプがやり易いように荷物を梱包した。

（白内障の子供たちの術後回診）

荷物は宝山さんが空港に送り届けてくれ、今回も来年まで自宅で保管してくださる。大変ありがたい。浜辺のレストランで満足感に浸りながら昼食をとった。午後は久しぶりにのんびりと過ごすことが出来た。
８月１９日（金）晴れ。ペンバ最後の朝食はリッチにペンバビーチホテルで食べた。ここは別世界である。その後 13:50 発のモザンビーク航空 TM315 便で首都マプトに飛んだ。定刻通りの出発で何だか気持ち悪い感じがした。今回は、すべてがあまりにもスムーズに進み変な気分である。マプト到着後シャワーを浴び日本大使公邸に向かった。大使とは１年ぶりである。モザンビーク保健省副大臣代理のカエターノ氏を交え歓談した後、今回のアイキャンプに関してプレゼンした。カエターノ氏は我々の活動成果にとても満足し賞賛して、今後も保健省が協力すると話してくれた。その後モザンビーク眼科の指導者であるヨランダ先生が到着し話はさらに盛り上がった。大使は我々を労いの言葉とごちそうでもてなして下さった。最後に記念写真を撮ってすべての日程を終了した。
８月２０日（土）晴れ。マプト 07:00 発のモザンビーク航空 TM301 でヨハネスブルグに飛び、キャセイパシフィック航空 CX-748 に乗り換え、さらに香港で CX506 便に乗り換え、８月２１日（日）無事関空に帰国した。

AOSA の進化に誘われて

ツカザキ病院眼科　　長澤　利彦

「長澤、今年のモザンビークにはお前は行くことになってるから。」と平常の仕事と同様に内藤先生から召集がかかり、今回で 2 回目の AOSA プロジェクトに参加させて頂く事となった。今回は東日本大震災に伴い様々な事を考慮する必要はあったが最終的に活動する事になった。
徳島から関西空港に着くと井口さんと合流した。内藤先生、井口さん、この偉大な先輩方と海外医療活動を共にするのも 3 回目になる。毎回″ゴールデンコンビ″の情熱には圧倒され自分達世代も負けてられないと身を引き締められる。日本からモザンビーク、なんと長い道のりか。この行きの長旅に耐えられれば半分終わったのも同然だと思うが、お二人との長旅だとなんだか心地よい。香港の乗り継ぎで社本先生、沼田さん、アルコンの深川さんと合流し、南アフリカのヨハネスブルクの空港で一服するとモザンビークのペンバへ向かった。初回と比べると荷物の移動が格段に楽になっていた。今までのように超過料金も払わなければ重い荷物も運ぶ事もなかった。うーん楽ちんである。ペンバに着くと一足先に到着されていた宝山さん、吉田さん、竹山さんが出迎えてくれた。そして、なんと現地の病院職員のセルジオさん達も出迎えてくれていた。3 年前にはこんな事はなかったのに・・・。さらに現地の眼科研修医師 2 人が参加してくれた。仲間がどんどん増えていって、ちょっとした″7 人の侍″である。(実際は 4 人のサムライ、5 人のなでしこ、3 人の現地人だったが)

(術前検査中の長澤)

今回の宿泊地はホテルノーチラスリゾート。前回にも宿泊した場所である。ムエダでの活動拠点では水が使えず苦労したが、今回はある程度自由に使えるため衛生的で格段によい。また、目の前には海が出迎えてくれる事で精神的にも抜群だ。ホテルに到着後すぐに手術する病院に向かった。病院は新築されたばかりで手術場もかなり立派だ。空調管理も問題ない。手術顕微鏡を梱包から出して、手術備品も取り出しセッティングを行った。ここでも日本人スタッフの充実が感動を呼ぶ。3 年前には内藤先生の打ち合せ中に荒井先生とたった 2 人でセッティングした事が思いだされる。一区切りついたところでホテルに帰宅し、作戦会議。薄暗い電灯の下、異国の海辺で大きなテーブルを囲んだスタッフ会議も感慨深い。
さぁ、病院での仕事始め！多くの患者さんの診察と術前検査だが、ここでも初回の AOSA と比べ物にならないと感じる。初回ではある程度しか白内障のセレクションしかなされていなかった感もあるが、今回は現地スタッフのセルジオさんの実力のおかげでほぼ手術適応のある患者さんのセレクションがなされていた。ご援助のおかげで術前検査も進化している。眼内レンズも日本同様に各患者さんに合わせて選択できるようになった。手術準備も AOSA スタッフの充実によりスムーズかつ万全にできた。翌日からの手術では日本にいるとまず経験しない症例数を１日で執刀することになるが、一定の症例数を超えればランナーズハイのような状態になるので何症例になろうとも関係なくなってくるのが不思議である。

（額に日の丸を書きやる気満々の長澤）

確かに疲労感はあるが、心地よい疲労感で、なんといっても翌日の患者さんの笑顔が疲れを癒してくれる。中でも小児の白内障患者さんの笑顔はなによりであった。この瞬間は医師としての原点を心から実感できる時間で、この瞬間こそが AOSA スタッフの活動の原動力となっている。全体的に術後経過もまずまずであったが、やはり眼内レンズの挿入できない患者さんもおられた事は残念であった。

第 1 回目と比べ 3 倍以上の患者さんを手術できた事になるが、疲労感は格段に減っていた。宿泊地の環境もあったとは思うが、どうもスッタフの仲間に救われたようだ。モザンビークの白内障患者さんの圧倒的多さから考えると AOSA の活動はほんのささいな事かもしれないが、この 3,4 年で輪が広がって現地モザンビークの方々にもさらに協力して頂けるようになった。今回参加させて頂いた中での 1 番の収穫は、AOSA が若干ではあるが進化してきたことを肌で感じられたことだった。

今から 18 年前、ちょうど今の自分の人生の半分に当たる頃に幸運にも医学部に合格できた。合格後に高校の担任と進学指導の先生に後輩達の前で話をして欲しいと言われて体育館で全校生徒の前で話をした事がある。今から思えば恥ずかしいが、合格直後でハイテンションであったので、後輩達の前で"僕の夢は海外で医療活動をする事です！"と豪語した事が懐かしい。医学生になり、さぼり癖の駄目学生がたまたま出席した眼科授業で眼科医の海外医療活動のビデオを見たのがきっかけで、他科の選択をほぼ決定していたにもかかわらず眼科医を選択した。そして、その徳島大学眼科には海外医療活動のエキスパートの内藤先生がおられ、その縁で 3 回もの海外医療活動の機会を与えてもらった。今振り返ると、結果的に 18 歳の時に夢見ていた自分に近づいているのかもしれない。「点と点は過去を振り返ることでしか線にならない。」と言ったのはかのスティーブ・ジョブズの言葉である。この AOSA のプロジェクトも偶然が重なって内藤先生の何かの縁で始まり、最初は小さな種であったものが、少しずつ芽生えてきているように感じる。それを今回の活動で確実に実感できた。今の自分の年齢からくるのか震災があったからなのか、はたまた人生経験が多少増えてきたからなのか謎だが、最近ふと自分はなんのために生まれてきたのかを少し考えるようになった。また、現在の世界における日本の立ち位置から過去の日本の先人に比べ、自分を含めた自分達世代が自身の周りの事（例えば自分や医局のメンツのことだけ）しか考えないといった不甲斐なさ、またそれを常識と勘違いしている愚かさを感じる。当初は好奇心だけで始まった AOSA での活動が、今では自分の何かしないといけないといった感覚を穴埋めしてくれているのかもしれない。そしてこの活動を一時なもので終わらせてはいけないし、何をしているのか分からない感覚に襲われることがあっても地道に継続していかなければばらないとも思うようになってきた。
AOSA の進化に誘われて自分も少し進化できたのだろうか？最後に、この AOSA に何らかの縁で関わって頂いている方々に感謝し、引き続きご支援のほどをよろしくお願い申し上げます。

AOSA プロジェクト 2011 に参加して

社本眼科　社本真紀

2011 年 8 月 12 日（金）～21 日（日）の 10 日間、アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）の第 4 回モザンビークアイキャンプに同行させていただいた。

内藤先生の AOSA の活動を知ったのは、2009 年の夏であった。AOSA の第 1 回アイキャンプ活動報告書がクリニックに送られてきた。内藤先生が以前からネパールで医療ボランティア活動をなさっているのは存じていたが、モザンビークでの活動のことは全く知らなかった。モザンビークってどこだろう･･･。医局に在籍していたころ、ネパールの医療ボランティアに参加しそびれたことを思い出した。AOSA への寄付の振込用紙の通信欄に「外まわりでもいいので、ぜひ連れて行ってください」と書いた。

翌年の 6 月、クリニックに電話があった。「先生、徳島大学の内藤先生からお電話です。」とスタッフに言われ、びっくりした。なんと、内藤先生から本当にお誘いいただいたのである。「去年までと違い、今年はペンバという比較的いい場所でのアイキャンプの予定だから、女性でも大丈夫だと思うけど、どうしますか？」と。「はい、ぜひお願いします！」と申し上げたいところであったが、この時、私は臨月の妊婦であった。「先生、あの、来月出産予定なんです・・・。」「そうか、そりゃ無理やな。じゃあ来年やな。」

という訳で、やっと今回のアイキャンプに同行させてもらえることになったのである。

第 4 回となった今回のアイキャンプは、同じペンバでの活動としては 2 回目であったし、このアイキ

ャンプの経験者が 6 名もいらしたこともあって、とてもスムーズに進んでいたように見えた。

（モザンビーク人眼科医たちと社本）

それでも、やはり日本での状況とは全く異なり、何から何まで（本当に何から何まで！）準備する必要がある。当り前であるが、必要な物品を全て用意し、搬入しなくてはいけない。その段ボールの数は軽く 30 箱はあったように思う。顕微鏡を組み立てながら、ネジがない、レンチがない、あれはどこに入っていたっけ・・・と皆で段ボールをあれこれ開けて探す。そうこうしているうちに時間はどんどん過ぎる。日本でならどうということはないことでも、ここでは時間を取られてしまう。限られた時間の中で、毎年成果を上げていくということは、大変なことだと実感した。

今回の活動では、幸い過去最高の手術件数となったようである。それはすなわち、それだけ多くの方が見える喜びを手にしたということである。もちろんその裏には、内藤先生や宝山さんによる、気の遠くなるような綿密な下準備があることは想像に難くない。

初めてのアイキャンプであったが、非常に充実した貴重な経験をさせていただいた。実際どの程度お役に立てたのかは謎であるが、もし許されるのであれば、ぜひ 5 回目のプロジェクトにも参加したいと考えている。

最後に、このような機会を与えてくださった内藤先生、また AOSA の活動をご支援くださっている皆様に心から感謝申し上げます。

AOSA アイキャンプに参加して

山王台病院付属内科・眼科クリニック
看護師　沼田美紀

今年、自身としては 2 回目のアフリカ・モザンビークでの AOSA のアイキャンプに参加させて頂きました。

自分にとっては、行く国も、行う場所も同じアイキャンプは初めての経験でした。昨年の記憶や経験が少しでも活用できると、より効率良く動けるのではないかと考え、OPE をできるだけ途切れないように介助していくことを今年の目標にしました。

昨年の記憶通りモザンビークは遠い国でした。日差しは痛いほどなのに湿度が低いお陰で、記録的猛暑の日本から比べるととても過ごしやすく快適でした。また、同じ病院でしたが、作りたての OPE 室を使うことが出来ました。きちんと空調が効いている所で行えるなど考えてもいませんでしたので、うれしい誤算でした。(手洗いの蛇口が普通のひねるタイプで一人では手が洗えなかったり、天井には穴があってむき出しの配線がぶら下がっていたりはしていました)

（眼軸長測定中の沼田）

外来の準備や診察、検査はメンバーに経験者が多く、自分にとっても作業や検査の流れのイメージがだいぶはっきりしていたため動きやすかったです。同様に OPE 室の準備も昨年よりも広くなっていることもあり、とても作りやすく感じました。

モザンビーク側のスタッフも手際が良くなっており、昨年は OPE 翌日の診察は、私たちが患者さんのいるテントまで行きテント内を歩きながら診ていたものが、今年は、前日の OPE 患者さんのみをまとめて私たちが待機している場所に連れてきてくれ、かなりの時間の短縮になっていたと思います。

途切れないようにと考えていた OPE はやはりテンポが速く、私が行う器具の消毒を待っていただくことも多く、Dr に手伝っていただくことも多々ありました。また、物品が余らないように、無駄が少なくなるようにしたいと思いましたが、細かく出してもらうとその分外回りの手を削ってしまい外が動かなくなってしまうので、最初にある程度の量を出してもらったら後で余ってしまったり、その日の患者さんの残り人数を数えて出したものが、人数の把握がうまく出来ず結局足りなかったり余ったりしてしまい

ました。まだまだ無駄の出ないように出来る所があると思うので、次回の自分の課題かと思います。さらに、2 年連続してクローベクティスが詰まってしまったので、個別に洗浄することや、取り扱いについてもう少し詳しくモザンビークの医師に話をすることなどを考えていきたいと思いました。

限られた時間と人数でのアイキャンプですが、回を重ねるにつれ患者さんの人数が増えてきています。キャンプの最終日に「話を聞いて父親を連れてきたら来年来いと言われた」という方もいました。期待をされてそれに答えられる活動に参加できることはとても貴重な経験であると思います。手を引かれてきた方々が OPE 後に「見える」と喜ぶ姿や、自分だけで歩けるようになって帰っていく姿はやはりやっていて良かったと感じるものですが、今回は特に、両眼の OPE をした 2 人の子供が見えるようになり、本人も家族も嬉しそうにしていたことや、目が見えるようになったら学校へいけるという言葉がとても印象深かったです。

モザンビークでの眼科医療が行き渡るにはまだ相当の時間を要すると思われます。それまで少しでも手助けができたらと思います。

今回も言葉に関しては堪能な周りの方々に任せ切りでした。宝山さんを始め吉田さん、竹山さんありがとうございました。最後に活動に関わった皆様大変お世話になりました。また参加するにあたって勤務先の皆様には快く送り出していただきました。ありがとうございました。今後も継続して活動に参加したいと思っています。

第４回モザンビーク眼科医療プロジェクトに参加して

井口　博之

モザンビーク眼科医療プロジェクトも今回で４回目となりました。回を重ねるごとに手術件数が増え、活動成果の発展とともに現地で信頼され、モザンビーク保健省はますます協力的になって来ました。また我々も要領が分かって来て、細かい打ち合わせをしなくてもてきぱきと仕事が進行し、チームワークが良くなって来たと思います。さらに、我々のアイキャンプが知られるようになり現地の人々に浸透して来ていると思います。ただ患者さんとのやり取りで言葉の問題は大きいと思います。この点、現地語が分かるモザンビークの眼科の先生の参加や、ポルトガル語が堪能な宝山さん、吉田さん、竹山さんの活躍は素晴らしいと思います。今回も近くの村で友好を深めたりして国際親善につとめました。第５回のプロジェクトにも参加しようと思っていますが、今後ますます活動が発展するように努力したいと思っていますので、ご協力よろしくお願いいたします。

(現地の子供たちと交流する井口)

2011 年度第４回眼科医療プロジェクト報告

モザンビーク　宝山　晶子

２０１１年度の第４回眼科医療プロジェクトの報告を書こうにも、記憶が薄れて、思い出すのも難しくなっている。昨年８月のお盆休みを利用して、日本人チームがモザンビークに到着してからすでに８ヶ月が経とうしているからだ。だが、忘れられないことがいくつかある。

この活動には、毎年モザンビーク保健省に活動許可を申請しなければならない。申請後、保健省から連絡があり、医師ひとりにつき１５０００円を支払えといってきたのだ。

「え？どうして？ボランティアでわざわざ日本から来てモザンビーク人を助けてあげるのというのに。医師たちは航空運賃も医薬品もすべて自前でだしている。なのにあなたたちはさらに活動費を支払えというのか」と私は食ってかかった。が、担当者いわく「私にいわれてもわからない。そういう法規が最近できたから仕方がない」の一点張り。私は気分が滅入ってきた。が、こういう体験ははじめてではない。

アフリカでボランティアをする場合、ある覚悟が必要だ。それは５歳の子供を助けているという覚悟である。５歳の子供を助けたからといってお礼を要求できるだろうか。「これだけ助けてあげたのだから、せめて礼のひとつくらいいってほしい」という期待を胸にしまいこんで、「まあ、小さいから仕方がない」と頭をなでながら、投入し続ける以外にないのである。だからといって、アフリカの人たち全員がそうだというわけではない。なかには「自分たちのために、多くを犠牲にしてやってくれている。本当にありがとう」といってくる人たちもいる。まるで砂漠の中でオアシスに出会ったような気分である。このような大人の心をもった人たちが、この国全体で、

はたして何%いるだろうか・・・。そんなことを嘆息交じりに考えていたが、どうやら、最近海外からボランティアで来た外国人医療チームが、感染症をひきおこしたりするケースが増えていて、保健省は彼らに対して規制を強化せざるを得ないというのが第一の理由のようだった。

（検査中の患者の介助をする宝山）

手術患者の目標は１５０人だった。はたしてできるだろうか。２００８年が４７人、２００９年５８人、２０１０年１１３人と手術患者の数は着実に増えてきてはいたが。だがそんな心配は杞憂に終わった。最終日に１５３人目を手術したときは、本当に感動的だった。眼科医の先生方が、飲まず食わずで手術に専念してくださり、それを日本人およびモザンビーク人チームの全員が献身的に支えてくださったおかげである。満天の星空をみあげながら、潮騒の歌を聞きながら、病院の車で宿泊所に向かったときのあのさわやかな感動を忘れることはできない。

２０１２年の今年は、９月下旬に５回目の眼科医療プロジェクトを行う予定である。目標は２００人。先生方も張り切っておられる。それまでに準備しなければならないことは多くある。実をいえば、「もう先生、この辺でいいのではないですか。４回もやってきて、何百人も助けたのですから」といいたくなることもある。だが、中心にたたれる内藤先生の決意は固い。「医療プロジェクトというものは最低でも１０年が一区切りです。１０年やりつづければ、なにかが見えてきます」というのが先生の持論である。今日までこれたのも、内藤先生のその揺るがない決意と実行力、そしてネパールをはじめとした長年にわたる発展途上国での経験のおかげである。中心がふらふらしていては、全体が崩れる。が、内藤先生が中心に立たれている限り、このプロジェクトは着実に進展するだろう。

AOSA プロジェクトで学んだこと

看護師　竹山　直子

私が AOSA プロジェクトに参加させて頂くことが出来たのは偶然のことでした。当時私は青年海外協力隊員として AOSA が医療活動を行うペンバに住み、また医療従事者養成学校で看護学教員として活動していました。知人から AOSA の活動内容を聞き、プロジェクト参加の誘いを受けた当初は、「自分は眼科の経験もなく、手術室の経験もない」と消極的に考えていましたが、モザンビークに住み、ペンバで活動している日本人として、非力ながらも手伝えることがあるのではないかと思い参加することにしました。しかし今振り返ると、心の奥底には未経験の領域を見ることが出来るという看護師としての好奇心、また何より、１年半ぶりに日本人の医療従事者と仕事ができるという嬉しさの方が大きかった気がします。

一団の到着日に宿舎となるホテルで待ち合わせをしましたが、日本から到着後、休む間もなく早々に行動開始し、このプロジェクトにかける AOSA の意気込みと使命感を見たように思います。

今回のプロジェクトでは計 153 人の白内障患者を手術し、すべての患者がその目に光を取り戻すことができました。実はこの数は、私が想像していた人数よりもかなり多く、自身の地域保健における観察・考察の未熟さを知ることができました。

（手術後の子供に話しかける竹山）

モザンビークの医療はハード面・ソフト面ともに少しずつ改善していますが、決して楽観できるものではありません。マラリア・HIV の罹患率が高く、先進国であれば治療できる疾患でたくさんの人が命を落としています。このような、言わば“深刻な疾患”の陰に、“命に別状はないが QOL を著しく低下させている疾患”が隠れてしまっている現状があります。モザンビークに浸り、住人としても看護師としても医療事情を熟知した気でいましたが、AOSA の医療活動から自身の視野の狭さ、看護師としての観察

力不足を学ぶことができました。また内藤・長澤両先生の、患者の術後の生活に目を向けた処置を見て、退院後の家庭での生活こそ私たちが守るべきものだと、医療従事者の初心に帰ることが出来ました。

モザンビークは国土が広く、都市部と農村部では、インフラや医療事情に大きな差があります。整備された医療は首都に留まり、カボデルガド州のような首都から離れた地域には届きません。AOSA は決して大きな団体ではありませんが、だからこそ機敏に、本当に必要とされている人に、日本の高度な医療を届けることができます。今回手術を受けた 153 人は AOSA の存在なくしては白内障の手術を受けることが出来なかった人ばかりです。このような AOSA の活動のさらなる発展を祈念すると同時に、AOSA の活動を援助して頂いた皆様に、モザンビークに関わりのある者の一人として心から感謝の意を表します。

アフリカ眼科医療を支援する会(AOSA) アイキャンプに参加して

日本アルコン　深川　武司

平成23年８月12日から８月21日までの10日間、私はアフリカ眼科医療を支援する会(AOSA)主催の第４回モザンビークアイキャンプにアルコンメディカルミッションプログラムの一環として参加させていただきました。以前よりこのようなボランティア活動に興味を持っていながらなかなかその機会が無かったのですが、今回幸運にも参加させていただけることになりました。

渡航ルートは羽田～香港～ヨハネスブルグ（南アフリカ共和国）～ペンバ（モザンビーク共和国）という長旅でしたが、今回活動しましたペンバはこの時期冬ということで、日本の夏の高温多湿の気候と比べると非常に過ごしやすい気候でした。空港に迎えに来ていただいた現地の方に車にて送迎していただいたのですが、車窓から見えるモザンビークの情景を見ることによって、徐々に私は遠いアフリカに来たのだ！という実感を持ちました。

現地での活動は初日から顕微鏡の組み立てや消耗品の準備など慌ただしい毎日でした。翌日は朝から術前検査が行われました。診察室に到着した頃には既にたくさんの患者さんが緊張した面持ちで待機されており、日本ではほとんどないことですが、ほとんどの患者さんが手を引かれないと歩けないほどの重度の白内障であり、モザンビークの眼科医療の現状を目の当たりにしました。

３日目からいよいよオペがスタートしました。執刀は内藤先生（徳島大学）、長澤先生（徳島大学）、社本先生（社本眼科）が行いました。白内障手術装置が現地にはないためオペは全て日本では今ではほとんど見られない ECCE で行われ、３日間のオペでトータル 153 人（155 眼）と過去最高のオペ数を行う

(患者を誘導する深川)

ことができました。

手術翌日には術後の検査がありましたが、患者さんが眼帯を外した際に見える喜びに笑顔になる姿を見て、私もとてもうれしく思い感動しました。手渡した薬をしっかりと握りしめて帰って行く姿が印象的でした。特に全身麻酔でオペを行った先天白内障の２例の小児の患者さんが両眼の眼帯を取り、恐らく生まれて初めて見たであろう視界に、初めはキョトンとし、そして次第に喜びを表情に表していった姿には非常に感銘を受けました。

私自身、宮城県で東日本大震災で被災し、その際に様々な方々からご支援を受けました。困っている人を助けるというのは人として当然のことではありながら、日常生活の中で私自身何も行えずにおりましたので、今回 AOSA にスポットで参加させていただけて、とても光栄に思います。このすばらしい活動は継続して行っていただきたいと思います。このような貴重な経験をさせていただいたことに対し、AOSA に関わる全ての方々、そしてコーディネートしていただいた石井さんに感謝いたします。どうもありがとうございました。

（手術風景）

Ⅲ．2011 年度事業報告

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第４回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2011

（１）事業実施状況

2007 年の現地視察、2008 年からの３回の支援プロジェクトの成果をもとに第４回支援プロジェクトを立案し実行した。

2011 年 8 月 13 日～18 日、モザンビーク共和国北部のカボデルガド州にあるペンバ病院にて、眼科医療支援活動を行った。日本人スタッフは眼科医師３名、看護師２名、臨床検査技師１名、ボランティアスタッフ 3 名、合計９人の日本人チームとモザンビーク人眼科医２名が、地元眼科助手が集めた患者約 200 名を診察し、白内障手術適応患者 153 名を選択し手術を施行した。この中には先天白内障の 2 人の子供が含まれていた。手術は両眼失明患者を優先した。

8 月 19 日に、首都マプトの日本大使公邸で瀬川大使、保健省高官に活動内容を報告し、今後の活動につき討議し助言をいただいた。

（２）事業計画中に生じた課題と対処内容

① 2010 年の第 3 回支援プロジェクトの結果をもとに、さらに発展的にプロジェクトを企画した。立地条件の良い活動場所を期待したが、モザンビーク保健省から最終的に、第１回、２回はカボデルガド州ムエダを活動場所として指定された。ムエダはタンザニア国境に近いモザンビーク北部に位置し過酷な環境であるため、第３回目はもっと環境の良い場所（ペンバ）を希望し,ペンバで支援プロジェクトを行うことができ、移動に要する時間を有効に使え、たくさんの白内障手術を行うことができた。その結果第４回もペンバで行いさらに発展させることが出来た。

② 今回もモザンビーク人眼科医師の参加により大変助けられた。また、ポルトガル語に堪能な日本人スタッフの参加によりスムーズに仕事ができた。また、手術介助に看護師が大きな役割を果たしてくれた。

③ 看護学生の参加希望があったが、現場の混雑のため急遽取りやめとなった。今後看護学生の参加および教育に関して実施方法の検討が必要であると思われた。

（３）事業の成果

白内障手術に関しては、モザンビーク保健省の全面的な協力を得て、約 153 名の白内障手術という目標通りの成果を達成することができた。回数を重ねることにより、度々の意見交換ができ相互理解が得られ今後の活動の発展に役立つと思われた。

今回も前回同様、２名のモザンビーク人眼科医師を招待し、技術指導と情報交換ができたことは大変有意義であった。モザンビーク人眼科医師の今後の活躍を期待して、我々のプロジェクトへの参加招聘は継続していきたいと思う。また看護師、臨床検査技師の参加により、さらに質の高い医療ができた。今後もコメディカルの参加依頼を継続していく予定である。

（４）広報活動など

①当会のホームページを更新し、さらに動画(YouTube)なども更新し、世界に向けて発信しつつ、充実したものに改善した。(http://aosa-eye.org)

②我々の活動を広く理解して頂くために、広報活動を行った。大阪難波ロータリークラブ例会(2011 年９月１日、大阪)「第 65 回日本臨床眼科学会」(2011 年 10 月 10 日、東京）、徳島プリンスロータリークラブ例会（2011 年 4 月 8 日）で我々の活動を紹介した。

（患者さん用のテント）

（テントの中にはたくさんの患者さんがいました）

Ⅳ．2011 年度　会計報告

収入の部

１．寄付金	1,568,000
２．助成金＊	1,280,000
３．繰越金	2,065,513
４．利息	248
計	4,913,761 円

＊ 助成金内訳

日本眼科医会	500,000
徳島プリンスロータリークラブ	300,000
徳島県眼科医会	100,000
徳島大学眼科同窓会（黒瞳会）	100,000
新潟県眼科医会	100,000
新潟県国際交流協会	180,000
計	1,280,000 円

支出の部

支出項目

１．第４回モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具・医薬品等	524,993
現地購入医薬品	52,062
渡航経費補助	1,318,592
現地滞在費	360,240
モザンビーク人眼科医旅費支援	117,974
雑費	186,842
計	2,560,703 円

２．その他

印刷代（会報など）	350,020
日本眼科国際医療協会会費	50,420
新潟県国際交流協会入会金・会費	20,000
送料	51,380
雑費	57,434
計	529,254 円

総支出合計	3,089,957 円
次年度繰越金	1,823,804 円
計	4,913,761 円

Ⅴ．2012 年度事業計画
（2012 年４月１日～2013 年３月 31 日）

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 5 回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2012

１．事業の趣旨及び目的

過去４回の支援プロジェクト結果をもとに第５回支援プロジェクトを計画した。

① モザンビークで日本人医師による白内障手術を行うことにより、白内障による失明患者の軽減に貢献する。失明者は貧困に拍車をかけているため、手術によって視力を回復した人たちは労働力となり、貧困の改善に寄与することになる。

② モザンビークでは大部分の医師は都市に偏在し、特に周辺地方では、病院に行く機会に恵まれず、病気に関する知識に乏しい。病気に罹患しても約６割の住民は祈祷師に頼る。多数例の白内障手術を行うことにより、医療従事者の研修および地域住民に正しい医学情報を伝えることができる。

③ 人口 2000 万人に対し､眼科医は 13 名にすぎず、危機的状況である。現地の眼科専門課程研修希望者への技術指導、奨学金等の資金的援助を検討し、モザンビーク人眼科医の育成を支援する。

２．事業の内容

去年と同様に､｢モザンビーク共和国保健省｣と｢アフリカ眼科医療を支援する会｣との共催でプロジェクトを行う。｢モザンビーク共和国保健省｣は、眼科医療支援活動を行う病院を指定し、現地医師・看護師･眼科助手などの病院スタッフを動員し､我々NGO のスタッフと協力して患者治療にあたる。｢アフリカ眼科医療を支援する会｣は、眼科医師、看護師など眼科医療の専門家を現地に派遣し手術を行う。また手術用顕微鏡、手術器具、眼内レンズなどの医療機器、医療材料や医薬品を提供する。

本プロジェクトは､｢在日モザンビーク共和国大使館｣､｢在モザンビーク日本大使館｣､｢徳島大学医学部眼科学分野｣､｢新潟大学医学部眼科学講座｣および現地で活動を行っている NGO｢モザンビークの学校を支援する会｣より支援・協力を受けている。

①“アフリカ眼科医療を支援する会”第 5 回支援プロジェクト

既にモザンビーク保健省からはカボデルガド州ペンバ地区での活動要請があった。要請に従って 2012 年 9 月、カボデルガド州ペンバ地区において、第 5 回眼科医療支援活動（アイキャンプ活動）を計画している。現地に 1 週間滞在し、白内障による失明患者約 200 名の手術施行を目標としている。今回は昨年と同様に、日本人眼科医 3 名に加えて、眼科専門課程で研修中のモザンビーク人眼科医師２名と共に手術を行い、モザンビーク人医師への手術教育を行う予定である。手術用顕微鏡、オートレフ、眼軸長測定器をフルに使用して質の高い手術を行う予定である。

② 眼科専門課程研修希望者への奨学金の支給

モザンビーク人眼科医の育成が急務であるが、保健省の政策では眼科専門課程の定員は年間 1－2 名のみである。医学部卒業後に地方病院勤務の義務を終えて専門課程での研修を希望する医師は多いが、経済的な理由で断念する場合が多い。研修期間中に支給される給与で首都マプトでの生活は経済的に困難なためである。長期的視野に立ち、眼科専門医の育成をサポートするため、専門課程への研修希望者に奨学金を検討している。国立エドアルド・モンドラーネ大学医学部眼科教授兼マプト中央病院眼科部長でモザンビーク眼科医のリーダーであるヨランダ女史と協議し、年間１－２名の専門課程研修医師への奨学金を検討している。

３．現地支援活動計画日程

2010 年 9 月に支援活動を実行する予定である

9/21　日本発
9/22　モザンビーク入国、
　　カボデルガド州の州都ペンバに到着
9/23　事前準備、スタッフ打ち合わせ
9/24～27　現地にて眼科医療活動
　　（外来診察・白内障手術）
9/28　首都マプトへ移動、日本大使館表敬訪問
9/29　帰国の途に
9/30　帰国

４．事業の長期展望

（１）現地の協力

地方において病気に罹患しても、大多数の住民は祈祷師による伝統的治療を受ける。それは根本的な医師不足に原因し、地方住民は眼科医療の恩恵を受ける事が非常に困難なためである。そこで、我々の眼科医療支援活動により、地域住民および医療従事者に眼科医療に関して啓蒙することが重要である。実際に多数例の白内障手術を行って失明患者を救済することで、地域住民および医療従事者に眼科医療の重要性を啓蒙することが出来る。

さらにモザンビークの眼科医療体制の根本的な改善には、眼科専門医の育成が不可欠である。眼科専門課程研修希望者を対象に奨学金等の資金的援助を行い、長期的な視野でモザンビーク人眼科医の育成を支援する必要がある。

これらの目的を達成するためには、モザンビーク共和国保健省を軸に、モザンビーク人眼科医をはじめ関係者と連絡を密にし、協力体制を構築する必要がある。

（２）将来展望と資金計画

我々の活動は、モザンビーク眼科医療支援活動の第一次プロジェクトとして、５年の継続を目標とする。短期的には日本人医師によるアイキャンプでの白内障による失明患者の救済を目的とするが、長期的には地域住民および医療従事者に対する眼科医療の啓蒙を目的とする。さらに眼科専門課程へ進学を希望する医師に奨学金を支給する事により、将来的に年間１－２名の眼科専門医が生まれることを期待する。

５年ごとにプロジェクトの成果を評価検討し、次の５年間の目標を立てる。今年は５年目にあたる。次のステップとして、モザンビーク人眼科医の養成に加え、教育システムと診療体制の強化、さらには総合的にシステムを見直し、インフラの整備が目標となる。これらの計画の主役はモザンビークの人たちであり、彼らとの話し合いにより計画の細部を決定していく予定である。将来的には JICA プロジェクト等への申請も考慮している。

広報活動など

我々の活動を理解して頂くために昨年度と同様に積極的に広報活動を行った上で、寄附等を要請していく予定である。

①ホームページの充実

広報活動にホームページは不可欠であるため、昨年度開設した。今年度はホームページを徐々に充実させる予定である。

②学会での発表

昨年度と同様に臨床眼科学会インストラクションコースで発表予定である。

Ⅵ. 2012 年度予算

収入の部

寄附金	1,000,000
助成金	1,000,000
繰越金	1,823,000
合計	3,823,000 円

支出の部

1. モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具等	700,000
医薬品等	500,000
渡航費補助	1,000,000
現地移動費等	200,000
現地滞在費等	300,000
雑費	100,000
小計	2,800,000

2. その他

印刷費	300,000
通信費	100,000
雑費	100,000
予備費	523,000
小計	1,023,000
合計	3,823,000 円

（近くの村で）

（AOSA の会報を見る現地の人々）

Ⅶ. 活動資金・物品提供者名簿

（2011 年４月１日～2012 年３月 31 日、順不同、敬称略）
たくさんのご寄附ありがとうございました。
お礼申し上げますとともに、ここにご紹介させていただきます。

（徳島県）
井上　須美子、賀島　誠、賀島　正博、金川　知子、
兼松　誠二、鎌田　泰夫、川端　昌子、工藤　英治、
塩田　洋、篠賀　健、篠賀　知代、島　裕美、
下江　千恵美、武田　美佐、多田　糸図、
谷口　冨志子、内藤　毅、中西　淑子、
中屋　由美子、長澤　利彦、布村　元、秦　聡、
秦　裕子、林　英憲、林　勇樹、板東　康晴、
福本　幸司、藤井　邦隆、藤井　令子、藤江　準、
藤田　善史、細井　伝三、松本　治恵、水井　研治、
美馬　彩、村尾　史子、盛　隆興、山口　景子、
山田　修三、吉村　久
黒瞳会、コンセール合唱団、三河眼科
徳島県眼科医会、
徳島プリンスロータリークラブ
（香川県）
赤澤　嘉彦、岩田　明子、小木曽　正博、
小西　勝元、坂口　恭久、平井　健一、三崎　昌史、
吉田　慎一
（高知県）
内田　佳永、林　正和、山中　清香
（愛媛県）
木内　康仁
（岡山県）
浅原　貴志
（兵庫県）
馬詰　裕道
（大阪府）
井口　絹江、井口　博之、大中　信行、村井　達司、
森脇　宗樹、山本　忠男、山本　幸子、吉村　正明、
村田　利一
（滋賀県）
尾崎　志郎、宇野　繁博
（新潟県）
荒井　紳一、伊佐　清、今井　和行、大坂　芙佐子、
大竹　鷹夫、大平　廣司、小田　みのり、
神田　浩一、桑原　初子、斎藤　達也、佐藤　孝子、
佐藤　弥生、関塚　美津枝、
大仙寺六地蔵尊（石川　満祐）、高橋　午三郎、
武田　啓治、田中　公夫、橋本　薫、長谷川　栄子、
服部　房、藤井　靖、丸山　久正、水科　京子、
水野　光子、宮原　康次、村山　利、山崎　達男、
匿名（１名）
新潟県眼科医会、新潟県国際交流協会
（東京都）
荒井　和夫、社本　真紀、早馬　由美子、
日本眼科医会
（茨城県）
沼田　美紀、長井　恭子
（福島県）
中嶋　二朗
（北海道）
石丸　裕晃
（福岡県）
松井　雅美
（モザンビーク共和国）
竹山　直子、宝山　晶子、吉田　由香
（企業など）
旭化成（株）、エムイーテクニカ（株）、㈱オーヒラ、
ケイエムメディカル（有）、参天製薬（株）、
千寿製薬㈱、日本アルコン㈱

（寄付頂いた手術器材等）

（回診を待つ患者さん）

（回診風景）

（手術後の患者さん）

（出漁準備）

（魚屋）

（魚をとるカゴ）

（近くの村の女性）

アフリカ眼科医療を支援する会　定款

第１章　総則

名称

第1条　このNGO（民間非政府組織）は、名称を“アフリカ眼科医療を支援する会”とする。

第2条　英語名をAssociation for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)とする。

事務所所在地

第3条　このNGOは、主たる事務所を下記に置く。

徳島事務所：徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学医学部眼科学分野内

新潟事務所：新潟県新潟市中央区旭町通一番町757番地
新潟大学医学部眼科学講座内

第２章　目的および事業

第4条　このNGOは、眼科海外医療協力を行い、主としてアフリカ諸国の眼科医療の発展を支援し、アフリカ諸国の人々を失明の危機から救うことを目的とする。具体的には、眼科医師等のスタッフを現地に派遣して医療活動を現地で行い貧困のために治療を受けられない人々に対する眼科医療支援を行うこと、および現地の医療スタッフに対する眼科医療の技術向上のための教育を行うことをNGO設立当初の目的とする。

第５条　このNGO設立当初は、モザンビーク共和国を医療支援の対象とするが、人道的見地から活動は全世界にわたる。

第３章　会員

第６条　会員の種別

・正会員　このNGOの目的に賛同して入会した個人および団体
・賛助会員　同会設立目的への賛同者

第７条　入会金　入会金はとくになし

第８条　年会費　このNGOの設立当初の会費は、次に掲げる額とする

・個人　年会費　　1万円
・団体　年会費　　5万円

第９条　入会、退会については自由とする。ただし、正会員は役職につけば、相応の理由がない限り、職務を全うすること。

第４章　役員および選任等

第10条　このNGOに以下の役員を置く。

理事２名以上１０名以内、顧問１名以上３名以内
理事のうち、１名を理事長、１名を副理事長とする。

第11条　理事は正会員の中から選出する。

理事長・副理事長は、理事の互選とする。

第12条　理事が会計を兼務することは可能とする。

不正など、背任行為があった場合は、除名とする。

第５章　総会

第13条　このNGOの総会は、正会員をもって構成する。

第14条　通常総会は、毎年1回開催する。

第15条　総会は、以下の事項について議決する。

１）定款の変更
２）事業報告および収支決算の承認
３）その他運営に関する重要事項

第６章　会計

第１６条　会計報告は、年一回収支決算報告書としてまとめる。元帳、領収証は別に保管する。

第１７条　会計年度は、４月１日から翌年の３月３１日までとする。

第７章　雑則

第１８条　この NGO の設立当初の役員は、次に掲げる者とする。

理事長　：内藤　毅　徳島大学医学部眼科准教授
副理事長：荒井紳一　あらい眼科院長、新潟大学医学部眼科非常勤講師
理　事　：井口博之　東淀鋼材（株）会長
顧　問　：飽浦淳介　串本リハビリセンター所長
　　アジア眼科医療協力会理事長
顧　問　：阿部春樹　新潟大学医学部眼科教授
顧　問　：塩田　洋　徳島大学医学部眼科名誉教授

（敬称略：50 音訓順）

第１９条　この定款は 2011 年 4 月 1 日、一部訂正し、これを施行する。

（モザンビーク日本大使公邸にて、右端が瀬川大使です）